

Book

最近, おもしろかった本

『プロジェクトX リーダーたちの言葉』

今井彰 著 文春文庫 540円(税込)

超一流リーダーたちの仕事における生き様 発する言葉に千金の重み

本書は、題名から分かるとおり、NHKで放送されて話題となった番組「プロジェクトX」に登場した18人の現場リーダーたちの言葉を紹介したものである。

本書に登場するリーダーたちは、皆それぞれに強力なリーダーシップを発揮し、不可能とも思える大事業を成し遂げたり、極限ともいえる事態を乗り越えたりした人物ばかりである。

マツダ（東洋工業）のロータリーエンジン車を開発した山本健一氏。同氏曰く「インスピレーションは、確かに人間の特権だが、誰でもいつでも生まれるものではない。考えに考え、あらゆることを試み、ぎりぎりのところまで自分を追い込む努力をした人間のみに与えられるものだ。」

日本初のバチスタ手術を行なった心臓外科医の須磨久善氏。同氏曰く「医者というのは、患者のためにいるわけで、医者としての地位や名誉などどうでもいいことです。大切なのは、医者が患者から見捨てられないようにすることです。」

史上最悪といわれるホテルニュージャパンの火災。この火

災の救助にあたった特別救助隊を率いた高野甲子雄氏。高野氏曰く「人間は誰でも信念を持つことができる。しかし、極限の現場や厳しい状況になると、その信念はぐらつき、妥協に走るのが普通だ。そんな中でも、信念を持続するのは並大抵のことではない。」

彼らの発する言葉には、千金の重みがある。それは、真実、透徹した責任感に裏打ちされた強固な信念から発せられた言葉だからであろう。

そこには、困難にあっても、他人に責任転嫁をしたり、やっぱり無理だと諦めるような懦弱さは微塵もない。

職種は違って、超一流のリーダーである彼らの仕事における生き様から学べることは多い。仕事は、単なる収入を得る手段ではなく、自分の人生そのものであることを、本書は教えてくれる。仕事に忙殺される日常の中で、彼らの生き様に触れることで、新たな活力を得られることは間違いない。仕事に疲れている人にこそ、読んで欲しい一書である。

(会員 芳賀 こず江)



Cinema

心に残る映画

『星に願いを。』

2002年／日本／富樫森監督作品

陳腐な設定もまた魅力 心温まる、けれども、切ない物語

この映画を観たのは梅田だった。出張で行った大阪で1泊し、翌日、時間が空いたので、何となく駅前の映画館に入ったのだった。

主人公カナ（看護師）を演じるのは、竹内結子。結婚する前の映画である。竹内結子という女優が結構好きだ。NHKの朝ドラに出ていた頃から、将来綺麗になるぞ、と注目していたが、本当に綺麗になった。看護婦姿というのも、なかなか良い（変態か？）。

カナの勤める病院には、事故のため両眼失明し、発語もできなくなった患者ショウゴ（吉沢悠）がいた。カナは、ショウゴのリハビリを担当し、いつしか2人の間には恋心が芽生える。カナが自分の気持ちを伝えようとした晩、ショウゴは交通事故に遭い、運び込まれた病院で、カナの目の前で死んでしまう。

翌朝、ショウゴは、路面電車の中で目覚める。目も見えず、声も出ず。そこに聞こえてきた車内アナウンス。「青い流れ星の夜に死んだ人は、3・4日ここにいたことができま

す。でも、誰もあなたと気づきません。名乗ったら、あなたは消えてしまいます。」なんて陳腐な設定なんだ。でも、この陳腐さが、この映画の魅力でもある。

ショウゴは、保険会社の社員になりすまし、ショウゴの日記を読み聞かせる形で、カナに愛を告白する。あくまでも他人として。

他人としてしか愛を告白できないショウゴの切なさ。他人の口から、愛する人の告白を聞くカナの悲しさ。

その晩、カナは、日記帳には何も書かれていないことを、白いページを読むふりをして彼が愛を告白したことを、彼がショウゴであることを知る。しかし、彼がショウゴであることを知られると、彼の存在は消えて無くなってしまふのだ。

函館の美しい町並みと、ショウゴの奏でるハーモニカの調べが加わり、心温まる、けれども、切ない物語である。

（会員 木下 信行）



『星に願いを。』スペシャル・コレクターズ・エディション
価格：4,179円（税込）
発売元：パラマウント ホームエンタテインメントジャパン
発売中